



Title	大高順雄先生を悼む
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 2021, 60, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79399
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大高順雄先生を悼む

柏木 隆雄

大高先生のご訃報は昨年8月5日に小林宣之さんからメールで知らされた。7月26日にお亡くなりになったとのこと。この3月のガリアの研究会当日、待兼山の坂を下りて来られた先生にお会いして、今日は北村さんの退職記念の研究発表があります、と立ち話をしたところだったのに、と本当に驚いてしまった。

大高先生は神出鬼没で、私が放送大学大阪学習センターに勤めていた時も、不意に訪問されてお昼をご馳走になったこともあり、その後転じた大手前大学でも、本当にふらりと、しかしたくさんのお書物を入れたキャリーバッグを引いた姿にお目にかかり、小林さんと一緒に大学近くにあるネパール人のカレー屋にご一緒したこともある。学生時代から存じ上げている先生の精悍な、ちょっと脂ぎったような元気もりもりのお顔が、痩せられて頬もこけ、声もかすれておられたが、眼光炯々はそのままでの話しぶりは、いつも意気軒高で、「おい、学長してるそうだが、給料半分寄せ！」などとおどけた口調でおっしゃったりした。

思えば先生と初めてお会いしたのは大学院の教場で、黄色いオクスフォード版のマリ・ド・フランスの *Les Lais* をテキストとしての演習だった。先生は私が修士を修了した1971年秋に阪大に来られ、私が博士課程2年の頃から文学研究科の授業を担当されたのではなかったか。その前年に岡山大の杉富士夫先生から中世プロヴァンス語の集中講義を受けたのだが、噂によればその杉先生と合わずに岡大を退職されて、それを惜しまれた新村猛先生が、名古屋大退職後自費で作られた「西洋中世文明研究所」に呼ばれたと聞いた。新村先生を追懐されている文章がその追悼文集『緑の樹』（同時代社、1995）にある。

大学院での大高先生の授業はとにかく読んで訳していく、というもので、受講生は私と春木さんなど修士の数名くらいだったかも知れない。「ギジュマール」など2、3篇は進んだろうか。そのあと『オーカッサンとニコレット』も習ったと思うけれど、これは神戸女学院に就職してから二年生の演習にガルニエ・フラマリオン版を用い、学生たちを閉口させることになった。

杉先生との例にも覗かれるように、大高先生は若い頃、不羈奔騰、意欲満々の学者だったに違いない。先生はがむしゃらと言ってよいほどのエネルギーで資料と向き合い、それをとにかく形としてまとめようと奮励努力されたように思われる。それが多くの賞に輝く所以だろうが、時としてやんちゃに見える先生が人から十分に理解されず、その忿懣もあったかもしれない。阪大時代は同僚の高岡幸一さんといえば石橋で大酒されたのも、お酒が大好きというより、どこからか湧いてくる鬱屈を晴らすものだったような気がする。下校の道すがら、石橋駅に

近づく頃合いにお二人と遭遇して、「おい一緒に来い！と何度も連れ去られることになった。大高先生や高岡大人と無茶苦茶にお酒を飲んだあの頃のことを考えると、晩年にお会いした先生はびったりお酒を止めておられて、まさか、とまったく信じられなかった。先生のお話によれば50代後半あたりから、おそらく医師の勧めもあろうが体調管理に務められたそうだが、そこにも一途に突き進む先生のがむしゃさが覗いているような気がした。

先生はいろいろな会のお世話をなさることが多かった。大阪日仏協会とかフランス勲章受章者の会、旧制六高の卒業生である郭沫若の業績顕彰など。先生からのお電話やお会いした時に、そんなことが話題に出たことがある。大阪日仏協会での桑原武夫、佐藤朔、新庄嘉章、杉捷夫、関根英雄、田辺貞之助といったフランス文学の碩学たちの講演をまとめた『フランス文学とわたし』（平凡社、1985）は、先生なればこそ仕上げられた貴重なお仕事の一つだ。それは先生の人恋しさから来ていたのではなかったかと今にして思い当たる。何となくノンシャランに話されるように見えながら、先生の人を思われる気持ちはとても強く、お会いする度に、近頃高岡さんから音沙汰がないがどうしている？とか誰々の住所を知らないか？と昔の同僚や知人たちの消息を聞かれる声に、どこか人恋しい響きがあり、神出鬼没に私や小林さんを大手前大学に訪ねて来られたのも、もちろん福井秀加元理事長と一緒に立ち上げられた大手前大学アングロノルマン研究所での調査のついでということもあろうが、あいつらはどうしているのだろう？という優しい気づかいからに違いない。

先生が亡くなられて数カ月後、先生が手がけられた大手前大学所蔵のマニュスクリ *La fin de l'homme* の校訂本をシャンピオン書店のCFMA叢書（Classiques Français du Moyen Age）から刊行することはできないか、とレンヌ大学教授 Christine Ferlampin-Acher の意を受けた日本人研究者から問い合わせがあった。『人の死』は専門家の間でも存在が知られていない珍しい作品で、大高先生の研究は中世フランス文学研究に資するところが大きいという。すでにその責にない私は、交渉を現大手前大学学長と小林さんにお任せしたが、先生が晩年特に力を込められたお仕事が、無事にフランスで刊行され、斯界の評価を得ることを願ってやまない。

（大阪大学名誉教授・大手前大学客員教授）